NI Book review

1 「上がれ！ 空き缶衛星」

著者　川島レイ

新潮社／定価1260円

本書は「スポ根」ならぬ「理科根」ノンフィクション。指導教官の誘いにのって、ハワイで開催された日米シンポジウムに参加した宇宙工学専攻の学生たちに、突然与えられた課題は、「ジュース缶の人工衛星」をつくること。もちろん、作るだけじゃない。宇宙空間には行かないものの、アメリカのネバダ州から高度4000mまでロケットで打ち上げ、データレコーダーを回収するところまでを含めた「本物」の衛星づくりだ。

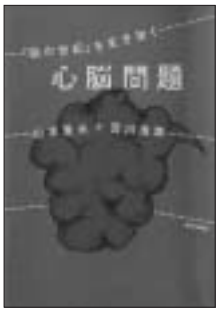
ものづくりの知識ゼロからスタートした彼らは、秋葉原でマイコンを調達し、「電源」リサーチのために電話をかけまくり、素材探しに東急ハンズに足を運ぶ。本書の帯にもあるように、本番が近づくにつれ「不夜城」となっていく研究室。

すぐに魔球が飛び交う「スポ根」にはうんざりだが、「理科根」の青春に魔法はない。だからこそ、打ち上がったロケットを見つめる彼らの姿に、読者は励まされ、ちょっぴり切なくなるのだろう。(哲也)

2 心脳問題 ――「脳の世紀」を生き抜く，

著者　山本貴光、吉川浩満

朝日出版社／定価2210円



ここ数年、「脳」を扱った本が軒並みベストセラーとなっている。だがその多くは、脳のトレーニング本や地図の読めないナントカなど、極めてお手軽に脳の機能から人間を説明する本ばかり。本書は、そうした通俗的な脳説明のトリックを解き明かすことをスタート地点として、哲学史上の第一級の難問に真正面からチャレンジした傑作。

その傑作たるゆえんは、心脳問題を理論の問題(権利問題)として扱うだけでなく、社会との関係(事実問題)まで射程を広げた点にある。なぜ脳問題は「その時代じだいの装いをまとって何度でも回帰してくる」のか、現代の「脳中心主義」を成立させる社会メカニズムにおいて、脳科学はどのような役割を演じ(させられ)ているのか――このような、従来見過ごされがちだった脳の社会学的な問題を、フーコーやドゥルーズといった現代思想を援用しながら、わかりやすく解説していく手腕はなかなか見事だ。著者の2人はともに1970年代生まれ。若手の在野ならではの怖いもの知らずな語り口も、読み手にとっては小気味いい。(哲也)

3 精子の話

著者　毛利秀雄

岩波新書／定価777円

精子を研究して半世紀という、精子研究の第一人者による、精子についての網羅的な入門書。その発見や基本的な構造から、精子形成のサイクル、運動や貯蔵、受精まで、精子に関するありとあらゆる学問的成果が詰まっている。とはいえ内容は決して無味乾燥ではなく、アクチュアルな話題にも目配せは効いている。たとえば、環境ホルモンによる精子危険説についても、統計的な異常を認める一方で、環境ホルモンが生物にはたらきかけるしくみはよくわかっていない、と指摘し、「遠回りでもまずはそれらの基本的な問題を明らかにすることが大切」という。さすがに本物は冷静だ。ED、人工授精、生殖介助技術といった最新のトピックを、学問的見地からしっかりフォローしてくれているのもありがたい。

カワトンボの雄が雌の受精嚢から以前に交尾した雄の精子を掻きだす話や、精子の鞭毛の運動に関与する新しいタンパク質を「チューブリン」と命名するまでの喧々諤々など、あっと驚く話や第一人者ならではのエピソードも随所にあって楽しめる。(哲也)

4 『反社会学講座』

著者　パオロ・マッツァリーノ

イースト・プレス／定価1500円

やれ少年が凶悪になっているだの、自立心が弱いだの、学力低下だの――といった具合に、マスコミは何かにつけて、若者を社会の元凶に仕立てたがる。本書によれば、こうしたもっともらしい社会問題のでっちあげは「社会学」という学問のお家芸だそうだ。なぜなら――、

「社会に問題がないと、社会学は存在価値を失います。ですから社会学者は自分で問題を捏造し、それを分析、処方箋まで書いてしまうのです」

なるほど、いわゆる自作自演ってやつですな。本書はそんな捏造された「常識」をメッタ斬りしてくれる痛快な一冊。ここで開陳されるのはたとえばこんな事実だ――高度成長期のほうが現在の何倍も少年凶悪犯罪が起こっているし、学力低下なんて昭和30年代から始まっている。現在の日本は大人のほうが子どもよりテレビの視聴時間が長い、などなど。

いずれの事実もマスコミのニュースからは聞こえてこないものばかり。読者は、読めば読むほど、目からウロコが2枚、3枚と落ちてくる快感を味わうことができるはずだ。(哲也)